

第4回 アートインビジネス研究会 要旨

日時：2024年1月17日（金）18:00～19:30

会場：同志社大学今出川キャンパス寒梅館 6階大会議室

テーマ：「平安時代の芸能と貴族社会」

講師：友吉鶴心（ともよしかくしん）氏（琵琶奏者、NHK 大河ドラマ芸能考証/指導、作曲家）

日本の伝統芸能と文化の深遠な歴史とその変遷について、友吉鶴心氏が多角的に語る講演記録である。彼は自身の家系や体験を交えながら、日本の芸能がどのように形成されてきたか、また明治以降の変化や現代の課題について詳細に解説している。

本講演は、日本の伝統文化と芸能の歴史的背景、変遷、現代の課題を多角的に捉え、深い理解を促す内容となっている。明治以降の文化変革や女性の役割、多民族性の視点を含め、日本文化の本質に迫る示唆に富んだ講話である。

友吉鶴心氏の背景と芸能との関わり

友吉氏は琵琶の家系に生まれながらも幼少期は琵琶を嫌悪し、様々な日本古典芸能の稽古を経験した。彼の学びは文字ではなく、身体で覚える伝統的な稽古法であった。また、祖父から譲られた1965年製の時計や、書道家田中親美（たなかしんび）氏が復刻した寸松庵（すんしょうあん）などの文化財を通して、過去の文化を深く理解しようとしている。

日本の文字と歌の関係性

漢字（真名）、仮名（ひらがな・カタカナ）の成り立ちを説明し、それぞれの文字体系が歌の詠み方や節回しに影響を与えていていることを指摘する。特に、歌うことは単なる音楽ではなく言葉の永続性や朗詠の文化に根ざしていると述べる。

美しい文字の表現は何かというと、これが歌につながるが、美しい歌は、私たちの例えれば百人一首を考える。詠うというは言偏に永いという風に書く。歌うっていうと歌唱の歌もある。口を書いて唄といいぱいという字もある。そうした場合これ全部用途が違う。

梵唄（ぼんぱい）、口で歌（唄う）というのは、どちらかというと読み物の歌である。文字で書いた和歌などである。詠というのはそれに対して詠うということあります。言葉が永い。朗詠である。それを朗々とほがらかに歌うという朗詠という歌がある。そうした場合に漢字のものを読むのか、ひらがなのものを読むのか、カタカナのものを読むのかで、実は全部歌い方が違う。

明治時代の文化変革と雅楽の現状

明治維新以降、日本の伝統芸能は大きく変容し、例えば雅楽の音律が複数の楽家間で統一され、現代の形となったことを指摘する。明治政府の政策が伝統の多様性を損なったとし、その影響は歌舞伎や三味線の調子にも及んでいる。

日本の文化芸能は、友吉氏は明治が文化大革命だという。明治でほとんど変わってしまっている。雅楽においても然り。明治7年に変えてしまっている。私たちが聞いて、これが1200年前の音楽だと言ってるのが、今の日本の音楽の現状である。

日本文化の東西南北の思想と芸能

1200年前の音楽とスピリッツは一緒で、あらかた方のリズムは一緒だけど多分感性が違うから、ほとんど違う。ただなぜ自分が新たに作曲できるかというと、簡単なこと。「東西南北」、これだけで音楽はできる。日本のものは、アジアのものは、これ以外何にも考える必要はない。

日本文化の基盤にある「東西南北」や季節感が、音楽や儀式、生活習慣に深く根付いている。例えば、正月の除夜の鐘や大嘗祭、おせち料理の配置に象徴されるように、自然や宇宙の秩序と調和した文化であると述べる。

芸能と税制・法律の関係

大宝律令と延喜式、東西南北、これがわかったら、全て日本の文化は分からぬことではない。大宝律令は残念ながらほとんど残ってない。延喜式は九条家本というのが残っているので、延喜式は900年、905年から910年、そのぐらい、10世紀の頭。大宝律令は、800年、755年とかそのぐらい。だから、芸術を志す是学生に大宝律令と延喜式を、日本の法律を読んでほしい。そこに全部、芸能のルールが書いてあるから。お給金がいくらだったか。どんなジャンルの芸能をした人たちがどんなジャンルにいたかというのが全部書いてある。法律で定められている。今の法律で芸能のこと何も定められてないが。

なんで変わってしまったのか。私たちの芸能の過去についての芸能の考え方っていうのは本当にその時々の千変万化で、時代時代によってカメレオンのように生き延びてきた。したがって、実はその時代の法律をきちんとわきまえないと、芸能の職分っていうのが分からぬ時代があったが、いつの間にか芸能がただ単に税金を払ってないというようになってしまった。

古代の大宝律令や延喜式には芸能の職分や報酬、税の免除条件などが詳細に記されており、芸能が国家制度に組み込まれていた。特に、年寄りは「木を植えること」すなわち「水を豊かにする」ことを税として納めるべきと定められている点を挙げ、日本の文化と法律の連関の深さを強調する。

日本人の起源と多民族国家としての文化

友吉氏は自身の家系を桓武天皇からの57代目とし、また日本人が多民族の混血であることを示唆。雅楽やその他の芸能も朝鮮・中国など外来文化の影響を受けつつ、日本独自の自然体質と精神性でオリジナル化していったと述べる。

日本の伝統芸能の自由性と統一性の相克

日本の音楽は個々の声質や読み方の自由性を尊重しつつ、宮中や都の芸能では統一性を求める傾向があることを説明。音読の授業の重要性や、歌舞伎のセリフ調子の変遷、三味線の調子の高さの変化など、芸能の変遷に伴う調和の問題も指摘されている。

音楽に関する芸能に関する歴史的思考力が欠如している。培われてこなかった。歴史的思考力というものはきちっと分をわきまえる必要がある。おそらく今文化と経済が分断されているような気がする。もっと自由でも、自由でなんか日本らしいものって、歌舞伎とか能とか色々やっているが、とても日本っぽくない、すなわち友吉氏が子供の頃に見ていた能や歌舞伎と雅楽や相撲やそれら一切と、芸者さんたちもそうだったが、一切違う。何かが違う。ずっとそれを問いかけている。何かが違う。それは多分、環境と生き方と経済感覚が違うのではないか。

女性と日本文化の関係性

伊勢神宮の御神体や大嘗祭の陰陽のシンボルを例に、日本文化における女性の重要性を説く。女性天皇の歴史や女性の美しさの時代への期待を述べ、江戸時代以降の朱子学や儒教の影響で女性の地位が歪められたと考察する。

伝統文化の継承と未来への展望

今雅楽聞くと全部同じに聞こるが、本来は雅楽を聞くと、あっ、これは春だ。秋に春の曲をやるとはなぜ。ああ秋に春を思う。それが日本人だからであるっていう考え方だった。秋に感謝の意を持って、来る春を豊かに思うということが年越しの儀式なので、そこにもう芸能が関わってくる。

友吉氏は縄文時代の遺物や平安時代の文献を通じて、過去の文化の尊さを再認識し、現代における文化継承の重要性を説く。新しいものへの関心は薄いが、伝統の精神を未来に繋げることが日本の発展に不可欠であると結ぶ。